



子どもをほめる ～ 何をほめるかが、先生のメッセージ ～

意欲的な学級になるように、子どもたちをたくさんほめています。しかし、授業では積極的な発言がありません。学級活動も消極的で、ほめても効果を感じられません。子どもたちとの関係は悪くないと思うのですが、もっと子どもたちが伸びる教室にしたいです。



評価言が多いと、気持ちが高まります。しかし、目標は意識しにくくなります。



評価言を焦点化すると、全員で目標を共有できるようになります。



みんなの前でほめるよりも、こそっとほめる方がよい子どももいます。

一般的に、ほめ方の基本は、心の底からほめることです。無表情の顔でほめられてもうれしくありません。特に低学年はオーバーアクションでちょうどいいぐらいです。もし、ほめることが見つからないと感じるようなら、ハードルを下げることです。「この程度もできない」は禁句です。

さて、たくさんほめても効果を感じないということです。今回は意図的なほめ方を考えてみましょう。

1 ほめて、目標を意識させる 価値の共有

「意見を出し合って考える」ことを目標にした授業を例に考えます。姿勢が良い、声大きい、字が丁寧と、何でもかんでもほめていると、子どもたちは目標を見失います。意見を出し合っている班や考えを変えた子どもをほめ、学級全員が目標を意識するようにほめます。

学級活動でも、目標や大切にすることを、まず先生が示すことが大切です。そして、それにそった行動をほめることで、他の子どもの意識が高まり、全員が同じことをめざす学級になっていきます。

2 結果でなく、過程をほめる 主体性・協調性

正解だけをほめていると、子どもにとって間違いは×という評価になります。次第に手を上げなくなるでしょう。結果でなく、学習の過程をほめることが大切です。

また、先生と子どもとの1対1のやり取りで進められる授業では、他の子どもたちと学び合う意識が育ちません。子どもは、先生相手に学ぼうとします。先生が求める答えを見つけようとして、自分の考えを大事にしなくなります。

友だちの発表から自分が発見できなかったことに気づいた、別の考え方に変わった、友だちとは違う意見を伝えられた、そうした言動をほめることで、子どもたちは学び合う価値を感じるのではないのでしょうか。一人ひとりの学びを大事にする学級は、一人ひとりを大事にする学級です。

見直すポイント

- ① 気持ちを高めるか、意識を高めるかで、ほめ方が違う
→ 目標の共有を図るなら、ほめる内容を焦点化する。
- ② 過程をほめることで、主体的、積極的、協調的に。
→ 結果をほめることは、あえて控えることも。

子どもを叱る ～ 叱ることは、考えさせること ～

注意されると、感情的になる子どもや、無気力になる子どもがいます。子どもが間違っただけで注意すると、その指導に抗議をしてくる保護者までいます。家庭でも、学校でも、きちんと叱られていない子どもが増えているのではないのでしょうか。



見て見ぬふり、叱るべき時に叱らない。
これでは、自分で正していく力が
子どもに育ちません。



子どもの言葉を聞こうとせず、
威嚇する、怒鳴りつける。
この場だけを押さえつけても、
いつか手がつけられないことに...

そういう理由だったのね

気持ちちはわかった
でもね



やってはいけないことよ
本当はどうすればよかった？

気持ちは受け止める。
しかし、許されない行為は認めない。

どのように関われば、子ども自身に
考えさせることができるのでしょうか。

きちんと叱る、それを補ってほめる。両方のバランスが子どもには必要です。しかし、叱ることを避け、叱るべき場面でも叱っていない例があります。逆に力づくで、子どもを抑えつけている例もあります。いずれの場合も、子どもに自己コントロール力が育ちません。

感情的に「怒る」とことと、冷静に相手のことを考えて「叱る」ことを区別して、適切に叱ることが大事だと思います。

感情のままに怒ると、子どもの心に悪い影響があります。

- ・理由を聞かないで頭ごなしに怒る。
- ・大きな声で威圧的に怒鳴る、威嚇する。
- ・嫌みを交えながら責める、ペナルティで脅す。

時には生身の感情を伝えるために怒ることがあります。しかし、怒鳴らないとまともに動けない状態は、怒鳴っても動けない状況に変わり、やがて手がつけられなくなります。

なぜいけないのかを考えさせ、適切な行為を選べるようにするために「叱る」ことは、大切な指導です。

1 どんな時に叱るかを理解させておく

(例) 叱るのは次の4つだと、学校や学級で伝えておく。

- ・体を傷つける危険な時
- ・心をひどく傷つける時
- ・人に迷惑をかける時
- ・ルールに違反する時

2 多くの人がいるところでは叱らない

自尊心が傷つく状況で叱っても、自省は難しい。

3 人格を否定するのではなく、行為を否定する

「あなたはダメ」「いつも失敗する」という言葉ではなく、「この行為はダメ。なぜなら・・・」と伝える。

4 一方的に叱らず、聴く、考えさせる、諭す

子どもの言葉にも耳を傾けながら、語気を荒げず、どこがいけなかったのか、どうすればよかったのかを考えさせる。

行為は認められないが、その時の気持ちは受け止めること、叱った後にフォローすることも大切。

恐怖や放置の経験がある子どもは、注意されると、興奮して暴れる場合があります。「自分の気持ちは分かってもらえない」というトラウマが根底にあります。子どもの気持ちは否定しないで受け止めつつ、暴力を止めるという難しい対応が求められます。SC等の専門家と連携して、感情コントロールのスキル、気持ちの言語化、愛着支援等、アセスメントしながらの関わりが必要になります。

見直すポイント

- ① 叱ることは、子どもに考えさせようとする働きかけ
→ 見逃さないで、ちゃんと叱る、ちゃんと考えさせる。
- ② 叱る・フォローする・ほめる 3つのバランスが大事
→ 感情的な叱責や一方的な説教は悪い影響を与える。